

まれた。捕獲量が増加するのは1980年頃からで、今では11河川で人工孵化放流事業が行われている。なかでも木戸川と請戸川が盛んで(図III.F.2.34)、本州最多の捕獲量を競っている。

1982年、東電第一原発の温排水を利用して福島県栽培漁業センターが大熊町の原因隣接地に完成し、福島県でも栽培漁業時代の幕が開いた。アワビ、ウニ、ヒラメの人工種苗生産が行われ、浜通り各地の沿岸地先に放流されて水揚増加に貢献しているほか、1995年からは同センターの種苗を利用したヒラメ養殖が大熊町水産振興公社により開始されている。

(高野岳彦)

## 5) 会津北部

### (1) 磐梯高原一大噴火がもたらした風光

磐梯山麓は日本の代表的な火山高原型観光地である。そのすぐれた風光と知名度の高さは、1888(明治21)年の大噴火の賜物である。同年7月15日に発生した噴火は山体の北半分を崩壊させ、火口の北8km先までを岩屑流で埋めつくし、3カ村を壊滅させ500人の命を奪った。この噴火は草創期にあった新聞や報道メディアにのって全国に流布した。噴火後も、内外の学者が現地に入ってこれも草創期にあった近代自然科学の目を向け、それまで「異変」として捉えられた自然の脅威に初めて科学のまなざしが注がれた。まさに磐梯山は、日本の近代初期に発生した顕著な自然現象の場となったことによって、全国の山岳のなかでも独自のステータスを獲得したといつてよい。

この大噴火で土石に覆われた北麓一帯では、既存の河川がふさがれて数カ月のうちに多くの湖沼が生まれた。やがて植生もよみがえり、一帯は大小200余の湖沼群と流れ山が複雑に入り組み、赤茶けた地肌で噴火の猛威を生々しく誇示する磐梯山が湖面に映え、絶景というに値する風光の地と化した。この比類なき自然変容は、この地を今日のリゾート地に変える観光資源の生成でもあった。

#### (a) 開発の歴史

大噴火以前の裏磐梯の村は、会津漆器向けの荒木地加工や炭焼きが主業で、住民には小椋姓が多かった。また集落と耕地以外の大半は官有地であった。噴火後、開拓入植も試みられたが、標高800mという高

冷地で土壌も薄く失敗に終わった。この地に人と物資を呼び込みはじめたのは、1920(大正9)年から始まる国有林開発である。猪苗代駅前に貯木場が設置され、そこから長瀬川に沿って小野川上流部の現在のグランデコススキー場付近まで24kmにわたる森林軌道が敷設された。小野川と曾原に木材製品事業所が設置されて、ブナ材、木炭、薪、鉄道枕木が生産された。森林開発とともに、小野川湖(1938年)と秋元湖(1940年)に落差利用の水力発電所が築かれた。噴火で壊滅した細野、雄子沢、秋元の3集落も再興された。

第二次世界大戦後、裏磐梯に物資と人と文化を運んだ森林軌道は、林業資源の枯渇によって1949年に廃線となり、木材製品事業所も1969年に業務を閉じた。それに代わって、裏磐梯は観光地としての新たな地域性を発揮しはじめた。

#### (b) 開拓集落の形成

第二次世界大戦後、まず曾原と蛇平に開拓地が開かれた。曾原地区は曾原湖畔の平坦地にあり、1946年に14戸が、翌年には12戸が入植して湿地性の原野の開墾に当たった。蛇平には1946年から1947年までの間に22戸が入植したが、ここでは土壌が薄くて良質の作物はできず、製炭や臨時雇用などの兼業が主業化したり脱落者も生じた。当初はソバ、水稻、バレイショなどが植え付けられたが収量は低位にとどまり、ダイコンやスイートコーンなどの高原型商品作物や、冬の収入源として綿羊の導入の努力も行われた。しかし男は林業や出稼ぎに出て、農地維持を女手に任せる農家も多かった。1959年、裏磐梯に最初の電話が入り、1961年には曾原開拓地に最初の電灯がともった。

入植農家の収入を補うために、1950年に桧原湖にワカサギが放流された。また曾原湖に自生するジュンサイも貴重な収入源となった。ジュンサイは1970年以降は減反水田に導入されて裏磐梯の特産品となり、1983年からは「木地師とジュンサイの里」の地域づくり事業の名称に採用された。初夏に沼に箱舟を浮かべて行われるジュンサイ摘みと冬の凍結した桧原湖上のワカサギ釣りは、裏磐梯の風物誌となっている。

#### (c) 観光地化の進展

裏磐梯における観光資源の形成は人間の手でも行われた。1910年代から官有地の植林の権利を得て私財を投じて緑化を進めた若松の醸造家遠藤十次郎は、今は石碑によって顕彰されている。1930年代には福島

県が県立公園に指定して猪苗代からアクセス道路を整備し、1940年代には若松の魚問屋田島慶三が桧原湖南岸一帯に観光施設を開発した。

しかし、本格的な観光地化は1950年の国立公園指定以降である。この指定を受けて、県営山の家、裏磐梯高原ホテル、国民休暇村が相次いで立地した。裏磐梯や沼尻などのスキー場も開設され、南麓の猪苗代スキー場とともに山麓一帯はスキーのメッカとなった。

裏磐梯での観光開発の中心は桧原湖の南岸地区であったが、北岸の早稲沢・金山・桧原集落では民宿中心の学生休暇村を旗揚げして、学生の長期受け入れに取り組んだ。1970年代には四つの山岳観光有料道路が開発されてモータリゼーション時代に対応した。この時期には旅館組合や民宿組合・温泉組合が結成されて、観光地の組織化も進み、開拓集落は観光集落へと変貌し、減少を続けた人口も増加に転じた。

ところで、磐梯山麓観光地のステータス形成には、皇室との関係も見逃せない。猪苗代湖畔の風光に感動した有栖川宮威仁親王が1909(明治42)年に湖畔の高台に別邸「天鏡閣」を建設し、ここに皇太子時代の天正天皇が行啓、1924(大正13)年8月には成婚間もない昭和天皇・皇后両陛下が長期滞在した。戦後も、1968年8月には裏磐梯国民休暇村で開催された国立公園大会に皇太子夫妻が、1970年の全国植樹祭には天皇・皇后両陛下が、1974年の冬季国体には皇太子夫妻がそれぞれ参加して裏磐梯高原に滞在された。首都圏との近さもあって、磐梯地域は観光地として独自のステータスを形成している。

1978年、一挙に38件のペンションが裏磐梯に開業した。ペンション団体はすぐに学生誘致に力を注いで、自然環境を利用した自然体験型リゾート地としての新たな展開を始めた。1980年代後半から1990年代初めのバブル期には、折からのリゾート開発の波を受けて猫魔・グランデコという大規模スキー場が誕生した。南麓に開設されたリゾートホテル付きスキー場群とも合わせて、スキー場の激しい競争時代に入っている(図III.F.2.35)。

噴火100年を迎えた1988年には噴火記念館が開設されて、磐梯初の本格的な自然学習施設となった。各ペンションや国民休暇村でも散策コースや冬季ツアーコースの充実に入れ、学生向けの運動施設も拡充された。「エコツーリズム」の呼称が流布してきた2000年には全国規模の大会が開催された。

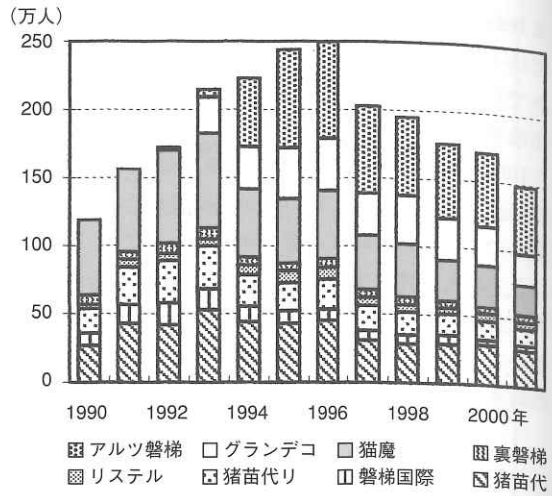


図 III.F.2.35 磐梯山麓スキー場の入り込み推移

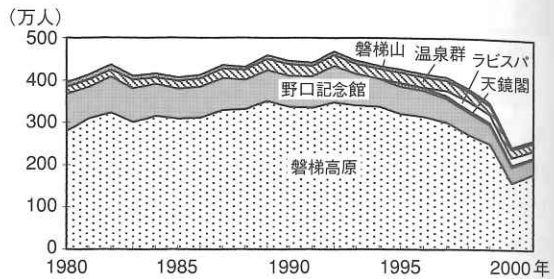


図 III.F.2.36 磐梯山周辺観光地の入り込み推移  
「温泉群」は横向・沼尻・中ノ沢温泉の計。

1991年の磐越自動車道延伸による観光地間競争の激化と、直後のバブル崩壊・リゾート開発退潮による不況ムード、そして2000年8月の火山活動情報による甚大な風評被害に直面しながらも(図III.F.2.36)、磐梯高原地域は従前からの知名度とすぐれた風光という自然資源を生かした自然体験滞在型観光地に変容しようとしている。(高野岳彦)

## (2) 会津若松

会津若松は近世以来の会津地方の行政・経済・文化の中心地である。国土交通幹線が通る中通り地方とは春梁山脈で隔てられた袋小路的な地域条件から、市勢は高度経済成長期を通して福島市や郡山市に比べて停滞的であった(図III.F.2.37)。しかし1990年代以降、高速道路の延伸によるアクセス性向上、IT専門の県立会津大学の開学とそれを核とする産学共同のビジネス創出、そしてレトロな町並みづくりによる街中観光への取り組みなど、全国的にも注目を集める地域